

日本文学研究資料叢書

新古今和歌集

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

新古今和歌集

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

新古今和歌集

定価 2,800 円

昭和55年4月1日発行

編者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山崎 誠

101 東京都千代田区神田神保町1-39

発行所 有精堂出版株式会社

電話 03(291)1521~3 番

振替口座 東京 9-40684

文弘社

3392-550667-8610

目次

| | |
|--------------------------------|---------|
| 新古今的なるものの範圍…………… | 風巻景次郎…一 |
| *…………… | |
| 中世和歌―その範圍と特色―…………… | 安田章生…三六 |
| 堀河百首と中世和歌…………… | 峯村文人…三三 |
| 中古和歌から中世和歌へ…………… | 稲田利徳…四四 |
| ―表現手法の変化の様相―…………… | |
| 新古今的妖艶美と平家一門の栄華…………… | 谷山茂…三七 |
| ―附、治承三十六人歌合・月詣集・千載集のことなど―…………… | |
| *…………… | |
| 新儀非抛達磨歌の時代…………… | 久保田淳…三三 |
| 後鳥羽院初期歌壇の形成…………… | 有吉保…二二 |
| ―正治初度百首を中心に―…………… | |
| *…………… | |
| 新古今和歌集の撰定と後鳥羽上皇…………… | 小島吉雄…一三 |

新古今和歌集部類時代に関する一疑義について……………後藤重郎…一五

新古今和歌集写本にみられる撰者名注記と定家八代抄……………樋口芳麻呂…一三

新古今的世界の形成 — 歌材の展開を中心として —……………有吉保…一六

*

新古今の方法 — 集巻頭歌をめぐって —……………藤平春男…一七

「はかなしや」稿 — 新古今的初句切れの論のために —……………石川常彦…一八

新古今的表现成立の一様相

— 「むなしき枝に」 「露もまだひぬ」をめぐって —……………佐藤恒雄…一九

新古今集における叙景歌の一考察……………片野達郎…二〇

— 装飾的表现の系譜について —

定家の歌における「空間」……………赤羽淑…二三

新古今和歌と超現実主義……………石田吉貞…二四

新古今風に萌せる象徴の過渡的傾向……………岡崎義恵…二六

*

藤原俊成の幽玄論ということ……………藤平春男…二七

有心の課題 — 定家歌論研究四 —……………田中裕…二八

*

解 說……………

新古今和歌集研究参考文献……………

| | | | | | |
|---|---|----|---|---|----|
| 辻 | 田 | 川 | 辻 | 田 | 川 |
| | 村 | 平 | | 村 | 平 |
| 勝 | 柳 | | 勝 | 柳 | |
| 美 | 壱 | 均 | 美 | 壱 | 均 |
| | | … | | | … |
| | | 三三 | | | 三三 |

新古今的なるものの範圍

目次

- (一) 序——万葉的と新古今的
- (二) 諸本の異同の処理の仕方——歌数の差・作家数の差・排列順の差の処理——八代集抄本の採用
- (三) 八代集抄本による統計——統計が暗示する拾遺群と千載群
- (四) 歌風から見た拾遺群と千載群
- (五) 新古今集の歌の排列から見た拾遺群と千載群
- (六) 当代歌学書の所論から見た拾遺群と千載群——新古今的なるものは千載群に依拠するがそれだけではない
- (七) 千載群のみでは新古今的なる自然鑑賞の叙景歌の例証を有し得ない
- (八) 玉葉集・風雅集に於ける新古今的なる叙景歌——新古今的なるもの
の依拠として千載群と玉葉集・風雅集の叙景歌とを併せ見るべき事の提
案

一

万葉的と新古今的と。この二つの語は、常に対立的な意味に於いて考へられて居る。それ等は単に、万葉集なり新古今集なりといふ、歴史的特殊的存在としての歌集の特質を意図するに止まるもの

風巻景次郎

ではない。又単に、万葉集なり新古今集なりの歌群の歌風に類似することの称呼であるに止まるものでもない。それ等は実に、和歌の表現様式として可能なる、対蹠的な二つの典型を示すものとして用ひられて居る。

かく万葉的と新古今的といふ語が、和歌様式の二つの典型を示すものとして許される根拠は、勿論万葉集の歌が、一つの典型的なものを示して居るに對し、新古今集の歌が、それとはおよそ反對の、他の一つの典型的なものを示して居ると見られるに在る。

しかるに此処に一つの疑ひが存在する。それは、万葉的典型は万葉集の歌によつて完成された作品を事実を示し得るが故に、万葉的といふ語は、この種の典型の名称としてふさはしいとするも、新古今集の歌は、万葉的なる典型に對立する典型を代表し得る程完成された作品であるか否かは疑はしいといふ意見である。この疑ひが許される事となれば、習慣は別として論理上新古今集は、一人で新古今の典型を代表する事を得なくなるか、又は、万葉に對立する典型を新古今的と呼ぶ事が穩当を欠くことになるであらう。更に又、新古今集の歌は、すべてにわたつて未完成なものであるか、或は又あ

る範圍に於いては完成されたものであるか、もし又ある範圍に於いては完成されたものを持つとするならば、他の部分に於いて完成した作品を、別の歌集から発見する事は出来ないであらうか等の問題が、それに続いて生じ得るであらう。

かくて問題の緒は、新古今的なる概念を明確にさせる事に存して居る。それを明らかにして行けば、次ぎ次ぎに他の問題をも解決する事が出来るであらう。

二

それでは一体、新古今的といふのは何であるか。又新古今的な歌の完成した形とは一体如何なものであらうか。しかし乍ら新古今的といふ概念が新古今集並びにその歌に依拠する限り、終始新古今集そのものに即して考へられなければならない問題である。

けれども又、新古今集に即するといふ事は、一概に簡単な事とは言へないであらう。何となれば新古今集が、ある一時期の歌人の作によつて成立して居ればよいのであるが、事實は万葉集以来各時代の歌人の作を網羅するのであつて、しかも尾上博士の計算によれば、半数以上が、元久二年新古今成立当時すでに世を去つた人々の作である。したがつて、新古今集には、その歌風より見ても、種々の時代のものが混在するわけであるが、それにも拘はらず、各時代の作品の単なる羅列に終らないで、総括的に新古今集的な風韻の存する所より見れば、新古今的なるものは、各時代の作品にわたつて存在する所のものであつて、短かいある時期の歌風とのみ見る事は出来がたくもなつて来るのである。故にその作品に即して新古今風を問題とする以上は、その作品を無条件に取り扱ふ事は不可能であつて、その個々の作品の幾何が何時頃の作であるか、そして又、新

古今集の撰者は、それ等の作を如何に取り扱はうとして居るか、これ等の点に關しては、終始注意を怠る事が出来ないのである。

故にこの小論は、先づそれ等の必要に應ずる為、新古今集の全作品の整理統括に出發しなければならぬ。扱て併し当面の問題となる所は、諸本の間にある異同を、如何に取り扱ふべきかを一定して置かなければならぬ点である。新古今集成立の事情より見るも、單なる誤写等より生ずる辭句の異同等同一視出来がたい異同の存する事は当然であつて、それ等を無視する事は出来ないであらう。

扱て諸本間のそれ等の異同は種々の点について存在するが、その中でも当面の問題に直接關係するものとして、少くとも第一に歌数の差、第二に作家の数の差、第三に歌の排列の差、この三つを挙げることが必要である。今一つ重要なものとして、作品そのものの辭句の、誤写によると思はるゝ異同が存するが、これは重要であるに拘はず、さし当つての問題でないから、こゝには触れないであらう。さて以上の三つの異同を、最もよく知られて居る諸本にとつて比較して見る事にする。その本として、

流布本(刊本)

八代集抄本(刊本)

烏丸本(宮内省圖書寮蔵) 藤村作博士校訂され「新古今和

歌集」として刊行。

柳瀬本(淺草文庫蔵) 三矢・武田・折口三氏校訂され「隱岐

本新古今和歌集」として刊行。

の四本をとる。(後二つは問題の隱岐本である。)そして順次、右の三つの点に就いて考へるであらう。

第一、歌数の差。歌数は、八雲御抄に一九七八首とあり、拾芥抄

もこれを受けて同数に記録して居る。又国歌大観は一九七九首とあるけれども、これは番号の附け誤りである。右四本のそれぞれ⁽⁴⁾の歌数は事実上何れもそれ等より多い。これを表示すれば次ぎの如くである。

右表の数字は四本各巻の歌数を示し、左側括弧内の数字は流布本歌数に対する三本の増加数である。流布本最も少く、抄これに次ぎ、烏丸本が最大であり、その差八首である。この各歌の増減は、

春下 古里に花は散りつつみ吉野の山の桜はまださかず也

いかにせば世にふる眺め柴の戸にうつろふ花の春の暮れ方
恋しくばかたみにせんと我が宿に植ゑし藤波今盛り也

| 烏丸本 | 柳瀬本 | 抄 | 流布本 | |
|-----------|-----------|-----------|------|----|
| 98 | 98 | 98 | 98 | 上春 |
| (+3) 79 | (+1) 77 | 76 | 76 | 下春 |
| (+2) 112 | (+2) 112 | (+1) 111 | 110 | 夏 |
| (+2) 154 | 152 | (+1) 153 | 152 | 上秋 |
| (+1) 115 | (+1) 115 | 114 | 114 | 下秋 |
| 156 | 156 | 156 | 156 | 冬 |
| 50 | 50 | 50 | 50 | 賀 |
| (+2) 102 | (+1) 101 | 100 | 100 | 傷哀 |
| 39 | (+1) 40 | 39 | 39 | 別離 |
| (+1) 95 | 94 | 94 | 94 | 旅躰 |
| 91 | 91 | 91 | 91 | 一恋 |
| 68 | 68 | 68 | 68 | 二恋 |
| 85 | 85 | 85 | 85 | 三恋 |
| 102 | 102 | 102 | 102 | 四恋 |
| 100 | 100 | 100 | 100 | 五恋 |
| 152 | 152 | 152 | 152 | 上雑 |
| 102 | (+1) 103 | 102 | 102 | 中雑 |
| (-2) 162 | (-2) 162 | 164 | 164 | 下雑 |
| (-1) 64 | (-1) 64 | 65 | 65 | 祇神 |
| 63 | 63 | 63 | 63 | 教釈 |
| (+8) 1989 | (+4) 1985 | (+2) 1983 | 1981 | 計 |

流布本・並に抄に対し、柳瀬本・烏丸本ともに、同じ歌を雑下に於て二首、神祇に於て一首減じて居る外、流布本を除く他の三本は、春下・夏・秋上・秋下・哀傷・離別・躰旅・雑中の八巻の何れかに於いて、すべて歌数が多い。しかし流布本に無くして抄又は柳瀬本に見える歌は、すべて烏丸本にも存するかといふにさうでなく、三者の間に出入がある。その出入ある全歌を示せば次ぎの如くである。

(家 持) 柳瀬本

(末上夫皇)

烏丸本

(赤 人)

夏

時鳥昔をかけて忍べとや老の寢覚めに一声ぞする

五月雨の空だにすめる月影に涙の雨は晴る間もなし

時鳥花橋のかばかりに鳴くや昔の名残なるらむ

秋上

朝露の丘の萱原やま風に乱れてものは秋ぞ悲しき

契りけむ程は知らねど七夕のたえせぬ今日の天の川風

秋下

高円の尾上に立てる鹿の音にことの外にもぬるる袖哉

龍田山秋ゆく人の袖を見よ木々の梢は時雨ざりけり

哀傷

ともなれどおくれ先立つ程あらば形見に忍べ水茎の跡

離別

世の中のはかなき事を見る比はねなくに夢の心地こそすれ

羈旅

波の上にはのに見えつつ行く舟は浦吹く風の上るべなりけり

雑中

幾夜へし入江の松ぞ昔より立よる波の数は知るらむ

雑下

大空にちぎる思の年もへぬ月日もうけよ行末の空

神祇

住吉と思ひし宿はあれにけり神のしるしを待つとせし間に

神祇

住吉と思ひし宿はあれにけり神のしるしを待つとせし間に

この中鳥丸本哀傷の和泉式部の歌と柳瀬本離別の和泉式部の歌とは、同歌と目されるけれども、別の部に属し、且つ稍々語句の相異なる為、このまゝとする時は、互に入出ある歌数は十九首となる。これを四本に平均する時各集の有する歌数の異同は四・七五首即ち五首弱、これを最も歌数少き流布本の歌数に比するに、その率は〇・〇〇二三即ち二厘強に当るわけである。歌数に就いてはしばらくこのまゝとし、次に作家数に就いて調べるであらう。

第二、作家の数の差。作家名に就いては、諸本に異同が多いが、これは多く誤写に基づくものと感ぜられる。今一々を網羅する事は全

(顯 昭) 柳瀬本

(赤染衛門)

(増基法師) 抄

(太上天皇) 抄

(宇治前関白)

(太政大臣)

(悪慶法師) 鳥丸本

(前大僧) 柳瀬本

(正慈円) 柳瀬本

(和泉式部)

(盛明親王) 柳瀬本

(和泉式部) 柳瀬本

(躬 恒) 柳瀬本

(後 成) 柳瀬本

(貫 之) 柳瀬本

(太上天皇) 抄

(能 宣) 抄

(津守有基) 抄

流布本

流布本

流布本

流布本

流布本

流布本

く無意義であるから、重要なもののみを左に掲げ、しかる後、その無意義である理由を示さう。

一、正三位季能と正三位秀能。春上にある「花ぞ見る道の芝草ふみわけて」の歌の主であるが、柳瀬本のみ季能で、他の三本は秀能とあり、抄には特に河内守秀宗子法名如願と註する。しかし如願ならば、北面の武士藤原秀能であつて、正三位ではない。しかも他にはすべて藤原秀能とのみ記されて居て、位階官職を記さないのである。それに対し季能はすべて正三位季能とある。その書き方より推して、明らかに柳瀬本の如く季能とするが正しいのである。正三位

秀能といふ歌人は、二十一代集を通じて存せず、勿論新古今時代にも存しない。

二、壬生忠岑と壬生忠見。夏部にある「いづちとか夜は螢ののぼるらむ」の歌の主であるが、柳瀬本は忠岑として忠見と傍註し、他の三本は忠見とする。恐らくは忠見であらうが、確証はない。

三、左衛門督通光と右衛門督通具。秋上にある「さらに又暮をたのめと明けにけり」の歌の主である。この歌詞書は「千五百番歌合に」とあり、通光・通具ともに右歌合の作者であり乍ら、この歌は、右歌合中に見られない。随つて何れとも確定する事が出来ない。抄・烏丸本の二本ともに通光で、流布本・柳瀬本は通具であり、又柳瀬本には通光の由の傍註がある。

四、藤原顯総と藤原顯綱。秋下にある「独り寝やいと淋しきさを鹿の」の歌の主であるが、流布本・抄・烏丸本の三本とも顯綱とある。抄には後拾遺作者と註する如く、事実顯綱は後拾遺集の歌人であつて、この歌も「郁芳門院前裁合によみ侍ける」とあるから時代も合ふのであるが、柳瀬本に藤原顯総朝臣とし、一本を引いて顯綱の由註して居るのである。顯総といふ作家は新古今以前の勅撰集の中にも、ことに郁芳門院の頃の歌人の中にも見当らない。これは顯綱であらう。

五、寂蓮法師と寂然法師。冬部にある「たづねきて道わけわぶる人もあらじ」の歌の主であるが、流布本・抄・烏丸本に寂然とあるが、柳瀬本のみは寂蓮とある。寂蓮・寂然は外にも入り交つて居るが、この歌は寂然法師集にも見えて居て、寂蓮は誤りである。

六、俊恵法師と朝恵法師。秋下にある「村雲や雁のは風にはれぬらん」の歌の主である。四本とも朝恵とあるが、抄のみは、一本によれば俊恵の由を註し、勅撰作者部類にも、この歌一本に俊恵の由

記して居る。

七、高光と如覚。この二つは異名同人である。が何故かその作六首中、冬、恋一、雑上にある四首は高光と記し、雑中、雑下の二首は如覚とある。この二名は当然一人として扱はなければならない。

右の如きは、最も顯著な異同に過ぎないのであつて、四本とも一致しながら、その中の一本に、別人かの由を註に記した程度の異同を拾ふならば、遙かに多数に上るのであるが、それ等は今こゝに触れないで置かう。

扱て右の諸人の歌数を、勅撰作者部類によつて列記して見るならば、

正三位季能 三首

正三位秀能 / 三首

壬生忠岑 三首

壬生忠見 五首

左衛門督通光 一四首

右衛門督通具 一七首

藤原顯綱 二首

藤原顯総 / 三九首

寂蓮法師 三九首

寂然法師 九首

俊恵法師 一三首

朝恵法師 一三首

高光 六首

の如くである。扱て正三位秀能は誤りなる事明らかであり、顯総も誤りなる事略々明らかである。又高光は問題が無いとして、この三人を除去する事とし、他の實在する作家十人について見れば、朝恵

を除く外は、皆二首以上入集した作者であつて、たとへ前に掲げた歌の場合、その作者が何れに決定するとするも、他の歌の作者たる資格に救はれて、尚新古今作者の列から落伍する事は決して無いわけである。随つて、作者の数の異同を考へる場合には、たゞ漠然と作者名の誤写等を比較するのは無意義の事であり、二首以上の作を有する者同志の間に存する異同はしかく注意する必要が無い。

寧ろ最も注意すべきは、新古今集の作者ならざる別人の名に誤り写されたる伝本を有する作者の有無、並びに、一首のみ入集せる作者と認めらるる者にして、他の作者の名に誤り写されたる伝本を有する作者の有無である。この立場よりすれば、朝恵法師のみは問題となる。何となればもしその作が俊恵の作である場合には、朝恵は新古今作者の列より脱し、こゝに作家数に一人の差異を生ずるからである。

さて次に、前掲の諸本間の異同歌十九首の作者並びに歌数を一望する必要がある。その作者十六人の中十三人は、流布本に於いて、すべて二首以上入集せる作者である。たゞ、宇治前関白太政大臣・盛明親王・津守有基の三名は、一首づつの作者である。その中、前関白太政大臣は烏丸本に於いて二首となり、盛明親王は柳瀬本に於いて二首となつて居て、ともに増加はして居るが、減少はして居らず、何れの本からも脱落するおそれは存しない。唯だ一人津守有基は、流布本並びに抄に於いて一首であつて、柳瀬本・烏丸本ともにこれを存しない。即ちかの十九首の異同によつて、四本中の二本づつの間に、作者一人の異同が生ずる。

かくて、今かりに朝恵は俊恵の誤写に非ず、明らかに千載集の作者朝恵法師と同一人と仮定し、新古今作家の一人として計算し、正三位秀能・藤原顯経をそれぞれ正三位季能・藤原顯綱と決定する時

は、本によつて出入を見る作者は津守有基一名となり、四本の作者は、

流布本 三九五名

八代集抄本 三九五名

柳瀬本 三九四名

烏丸本 三九四名

となる。かくて、作者異同数の流布本作者数に対する率は、○・〇〇二三即ち二厘五毛強である。次ぎには歌の排列順の異同である。

第三、歌の排列の異同。歌の排列にも四本間に異同がある。先づ、卷三夏部の歌、流布本・抄に、

時鳥一声なきていぬる夜はいかでか人のいをやすくぬる

(家持)

時鳥なきつついづる足引のやまと撫子咲きにけらしも

(能宣)

とあるが、柳瀬本・烏丸本は前後逆になつて居る。又卷五秋下の歌、流布本・抄・烏丸本に、

妻恋ふる鹿の立ちどをたづぬればさ山が裾に秋風ぞ吹く

(匡房)

み山辺の松の木末を渡るなり嵐に宿るさを鹿の声

(惟明親王)

とあるけれども、柳瀬本のみは順序反対する。次ぎに卷六冬部の歌、流布本・抄・柳瀬本に、

深緑あらそひかねていかならんまなく時雨のふるの神すき

(本上天皇)

時雨の雨まなくし降れば槇の葉も争ひかねて色付きにけり

(入麿)

とあるのが、烏丸本には前後入れちがつて居る。更に又同巻の歌、

流布本・抄・烏丸本に、

冴えわびてさむる枕に影見れば霜ふかき夜のありあけの月

(皇太后宮大夫俊成女)

霜むすぶ袖のかたしきうちとけて寝ぬ夜の月の影ぞ寒けき

(通員)

とあるのが、柳瀬本では入れちがひとなつて居る。又卷十二恋二の

歌、流布本・抄・烏丸本に、一首をへだてて

いつまでの命もしらぬ世の中につらき嘆のやまずもある哉

(義孝)

いつとなく塩焼く蟹のとまび塩さし久しくなりぬ遇はぬ思は

(基輔)

の順に並んでゐるのが、柳瀬本では基輔の歌のつぎに義孝の歌が来て居る。又同巻の歌で、流布本・抄・烏丸本に、

床の霜まくらの氷きえわびぬむすびもかぬ人のちぎりに

(定家)

つれなさのたぐひまでやはつらからぬ人をもめでじ有明の空

(有家)

とある歌の定家の歌は、柳瀬本では、有家の歌よりも二首隔てて後に置かれて居る。

一体新古今集の歌は、後拾遺金葉頃を境界として、前後の二大時期に區別して扱はれて居るのである。これは後に改めて精しく触れられてあらうけれども、かくの如き標準に照して、右の六箇の排列の異同を考へるに、その中五箇は右二大別の中、明らかに同じ部類の歌群の内部に於いて倒置されて居るのであつて、唯一つ、太上天皇と人麿との場合のみは、天皇の前にこれと同時代の慈鎮その他の歌が並び、人麿の後には和泉式部の作その他が存在して居る。人麿

は、八代集としては古今集拾遺集の作家で、和泉式部は拾遺集の作家であるから、人麿と和泉式部とは同類と見なす事が出来る。故に、この部分のみは、太上天皇が前、人麿が後に来れば都合がよいのであつて、さうでなければ排列が混乱して来るのである。けれどもこれを概して言へば、歌の排列に於ける異同は、唯一箇所問題となるのみであつて、新古今集にとつて、重大な意義を暗示する程の問題ではあり得ない。

以上によつて、仮りに取られた四本に就いて、三つの見方からする異同が考へられて来た。その結果をこゝに今一度要約して見れば、歌数の異同の率は、流布本の歌数に対し二厘強、又作家数の異同の率は、流布本の作家数に対し二厘五毛強であつて、歌の排列の異同は重大なる問題を起し得る程の力を有して居ないのである。これ等の結果は一体何を意味するであらうか。それは四本を比較する事によつて検出し得た異同の如きは、統計的作業に當つては、十分切り捨てて差し支へない程度の端数に過ぎぬと言ふ事である。

勿論右の如き異同であつても、それが書誌的研究に當つてならば、重大な問題でなければならぬ。さり乍ら、今は新古今集の歌を統計的に整理統合して、より抽象的な一つの問題へ突き進む足場を作らうとして居るのである。そして、かゝる統計的取り扱ひをする為には、諸本間に存するこの程度の異同は黙殺されても大過のないといふ事が、右の結果の示す所である。かくの如く、何れの本を採用するとするも、統計的結果には殆ど差が生じないのである。底本の採用は任意で宜しく、何れを取るも自由である。されば、当面の問題としては、全歌数に於いて流布本と烏丸本との中間にあり、且つ最も広く知られたる本として、八代集抄本を取る事に決定するであらう。

三

扱て新古今集は、甚だ多く元久時代に現存しなかつた人の作品を包含して居る。したがつて山崎敏夫氏の言の如く、「たとへそれ等の歌も新古今時代の選者の新古今流の鑑賞眼によつて採録されてゐて、部分的に、技巧的また趣味的に新古今風ではあるとしても、到底それは嚴密な意味での新古今風であり得ない」とも言へるのであるが、又一方より見れば、かく過去の時代の作品を多量に包含する所又は包含し得る所に、新古今的なるもの特質があるのだとも見られるのであつて、新古今的なるものを考へるに當つては、この集が包含する各時代の作品を、数量的にも順序され方からも、改めて吟味する必要が甚だ多いであらう。

右の理由に従つて、八代集抄本を本として行はれた作業の結果の、必要なものを吟味しつつ、考へを推し進めて行くこととする。

新古今集抄の歌数一九八三首、作者三九五名である。先づこれ等

| 時代名 | 作者数 | 歌数 |
|--------|-----|-----|
| 古今集時代 | 二六 | 一六四 |
| 後撰集時代 | 二五 | 七三 |
| 拾遺集時代 | 四一 | 二三七 |
| 後拾遺集時代 | 六八 | 二〇二 |
| 金葉集時代 | 三二 | 九五 |
| 詞花集時代 | 一四 | 一〇八 |
| 千載集時代 | 七五 | 六七八 |
| 新古今集時代 | 一一三 | 三三二 |

の作者の幾何が何時代の歌人であり、その歌は何首であるかを見る為、八代集の中、その作者の作のはじめて見える集を以てその作家の時代と定めて分類した。この分類の標準は、当時の歌人達が、歌風の変遷を論ずる場合に用ひた標準であつて、当時の事情に即するものである。扱てその分類の結果は上表の如くに

なるのである。

万葉集時代の作家は十五名歌は五十五首である。その中人麿は古今集に七首拾遺集に一〇三首見え、赤人・家持・湯原王は拾遺集のみにそれぞれ、三首三首といふ風に見えて居る。他の十一名は八代集としては全く新古今集にはじめて顔を出すのであるが、それ等の歌は、万葉集に存しないものがあり、又万葉集には読人不知の歌であるに拘はらず、特定の作者の名を冠して取つたものもあり、又明らかに万葉集の作と雖も、筆を加へたものが多いから、これを万葉集として立てる事を止め、八代集中、その作のはじめて見ゆる集に分離させたのである。又読人不知の歌には、明らかに万葉集の歌があり、又その詞書によつて、その時代を明らかにし得る歌が多いけれども、全部これを除外した。又神祇仏菩薩の歌も計算の外に置いた。但し勅撰作者部類に菅原道真を神として扱つて居るが、これは實在の人物に就き計算に加へた。かくて算出した結果が上表の如くなるのである。

上の各歌集別に分つた作者数は、矢張り新古今集に初見の作者が最も多いけれども、これは到底その歌集の時代を代表するに足る作者数とは言へない。ことにこの中には、万葉集の作者で他の七集に見えなかつた十一人の作者が加はつて居り、他にも前時代の人で、はじめて勅撰集に入つた人も加はつて居るのであつて、実数は更らに減するのである。それに対して、千載集以前の七集に属する作者数を比較するに、略々その数は三倍して居る。

又その歌数より言ふも、新古今集にはじめて顔を見せた作家の歌は僅々三百首強で、全歌数の六分の一にも過ぎない。上の数字より見れば、新古今集は、新古今時代の作品作家の集ではなくして、万葉集以後、ことには古今集以後、各勅撰集の時代時代の作品作家の

總集とも見られるであらう。しかし右は余りに概論に過ぎるのであつて、殆どそれだけでは何等の結論にも到達する事を得ないであらう。されば更らに部分にわたつて緻密に觀察して行く必要が生ずるのである。今、新古今集初見の作者一一三名に対し歌三二二首であるが、千載集初見の作者七五名に対し歌六七八首であつて、断然千載集初見の作者が重きを為して居る。これは、新古今集初見の作者中十首以上のものは、

| | |
|---------|-----|
| 太上天皇 | 三〇首 |
| 皇太后宮俊成女 | 二九首 |
| 藤原雅経 | 二二首 |
| 藤原秀能 | 一七首 |
| 右衛門督通具 | 一七首 |
| 宮内卿 | 一五首 |
| 左衛門督通光 | 一四首 |
| 権中納言公経 | 一〇首 |

の八名に過ぎず、八首一名、七首二名、六首一名、五首一名、四首二名、三首五名、二首一七名で、一首のみの者実に七六名を算するのであつて、未だ千載集当時、入集するに至らなかつた幼稚の者にあつては、元久当時までに一家を成す程の者が少なかつたからである。

それに対し、当時第一流の名を為して居つた者は、たとへば俊成の如き高齢者は既に若くして詞花集に遇つた者であり、さうでなくとも若くして千載集に入集した年頃の者が多いのであつて、竟宴の行はれた元久二年を現在とすれば、既に実定・西行・俊成・寂蓮等、有数の人物で故人となつた人があるけれども、全体的に見て大部分は尚生存して居つて、この千載初見の歌人が新古今集成立の前

後では、最も目立つた役割を果して居た事は事実である。されば、

| | | |
|-----------|-----|-----|
| 西行法師 | 九四首 | 一七首 |
| 前大僧正慈円 | 九〇首 | 八首 |
| 摂政太政大臣 | 八〇首 | 七首 |
| 式子内親王 | 四九首 | 九首 |
| 藤原定家 | 四七首 | 八首 |
| 藤原家隆 | 四三首 | 五首 |
| 寂蓮法師 | 三九首 | 七首 |
| 藤原有家 | 一九首 | 一首 |
| 二条院讃岐 | 一六首 | 四首 |
| 後徳大寺左大臣 | 一五首 | 一五首 |
| 藤原清輔 | 一二首 | 一九首 |
| 入道前関白太政大臣 | 一一首 | 一五首 |
| 殷富門院大輔 | 一〇首 | 五首 |
| 鴨長明 | 一〇首 | 一首 |

と列挙して見れば、十首以上入集せる一四名のことに著名の者が、実はすべて千載集の作者なのである。外に、九首二名、七首一名、六首二名、五首三名、四首六名、三首五名、二首一〇名で、一首の者は三二名に止つて居る。即ち新古今集に於いては、はじめてこれに入集した若き公家たちに比すれば、若くして千載集に数首入集し、その以後も引きつゞき歌人としての活動を継続して、新古今時代の歌風を醸成順致した所の、既成の大家が厚く待遇されて居るのであつて、決して当時世に出たばかりの若者が横行して居るのではない。

又、詞花集作者を見るに、こゝにも注意すべき現象が存して居

る。こゝでは一四名一〇八首が新古今集に取られて居るが、それ等の作者は詞花集では一人（崇徳院）が五首、今一人（教長）が二首入集して居る外、皆一首の作者であつて、合計一九首を入集せるに過ぎない。しかもその一四名は、千載集では二名は入集してゐないので別であるが、残る十二名で一五七首の歌を有して居るのであつて、即ち詞花集作者は、詞花集よりも大部分は千載集に於てはじめて有数の作家となつた者のみが取られて居るわけである。

金葉集に於ける三二名の作者は、新古今集に九五首、即ち平均一名三首弱の割で入集せるに過ぎないが、これ等の作者は、金葉集で二二三首、千載集では一人入集してゐないから三一名で一九三首の歌を有するのであつて、平均して言へば千載集に於ても金葉集と同等に扱はれた者のみの歌が取られて居るのである。

かくて、数量的に見たる結果は、金葉・詞花の兩集の作者は、千載集に於いても認められたる作者が採用され、又千載集自身の作家は、新古今集当時の若き歌人よりも重んぜられて居るのであつて、重点は自づから千載集作家にかかつて来て居ると観ぜざるを得ないのである。

次に後拾遺集作者の問題に移ると、こゝにはじめて稍々統計上異質の数字があらはれて来るのである。後拾遺作者六八名に対し、後拾遺集では三二六首入集して居るが、新古今集では三〇二首取られて居る。これ等の作家並びに作品に就いて言ふに、金葉集では三一名一五二首、詞花集では三七名一〇二首、千載集では四〇名一〇〇首が採られたに過ぎず、作家数に於いて大略平均半数、歌に於いては平均半数を遙かに下るのである。

同じ事情が拾遺集作者に関しても顯著に現れて居る。新古今集に入集せる四一名の歌数について見るに、拾遺集では二七六首を存す

るに對し、新古今集には二三七首入集して居る。然るにこれ等の作者は後拾遺集で二九名三五九首であるが、金葉集では三名七首、詞花集では二一名九一首、千載集では一三名六六首が存するに過ぎないのである。

後撰集作者の新古今集に入集したものの二五名に就いて見るに、後撰集に九五首であるのが、新古今集では七五首採られて居る。右の作家は拾遺集で一八名八五首存するも、後拾遺集では一名一二首、金葉集は皆無、詞花集は三名五首、千載集では一名二首であるに過ぎない。

又古今集作者では二六名一六四首採られて居る。その人々の歌は古今集では計四一八首、後撰集ではその中二二名の分二七四首、拾遺集では一二名分三〇首存するが、後拾遺集以後に於いては皆無である。

これを要するに、古今・後撰・拾遺・後拾遺の四集の歌は、金葉・詞花・千載の三集に於いては、殆ど黙殺に近い形となつて居るのであるが、新古今集に於いては、再び総計に於いて大略原歌集の歌数に近い数（古今集だけは別であるが）を入集せしめて居るのである。金葉集以前の四集の作家が、金葉集以後遠ざけられて居た事は、和歌史の事実であつて、右の計数はそれに一致するものであるが、又新古今集が金葉集以後の常套を破つて、この古典的な四集の作家並びに作品を、金葉集以後の諸集のそれと同等に扱つたといふ一事は、新古今集がそれに先行する他の集に著しく異なる点として記憶しなければならぬ。

扱て以上の作業を今一度此で統括すれば次表の如くなる。

（次表の中、括弧内の小さき数字は歌人数で、新古今集の欄のは同集に入集せる人数である。随つて、原歌集の人数もそれに一致す

る。その他の分は、新古今集に入集せる者にして、他の歌集にも入集された人数である。大なる数字は、各集に於けるこれ等の人々の歌の総数である。

さて、右の統計作業の結果、自づと明らかになつて来る今一つの問題が存する。今、古今集より後拾遺集に至るグループと、金葉集より新古今集に至るグループとの、新古今集内に於ける関係を比較して見ると、各々最後に存在する後拾遺集と新古今集とが、入集人数に於て最高を示して居るが、入集歌数に於いては、それぞれ一ヶ月前の拾遺集と千載集とが最高を示して居る。又その一つ前の後撰集

| 新古今集ヨリ | 千載集ヨリ | 詞花集ヨリ | 金葉集ヨリ | 後拾遺集ヨリ | 拾遺集ヨリ | 後撰集ヨリ | 古今集ヨリ | |
|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|-------------|------|
| | | | | | | | (26) 418 | 集今古 |
| | | | | | | (25) 96 | (22) 274 | 集撰後 |
| | | | | | (41) 276 | (18) 85 | (12) 310 | 集遺拾 |
| | | | | (68) 326 | (29) 359 | (1) 12 | × | 集遺拾後 |
| | | | (32) 223 | (31) 152 | (3) 7 | × | × | 集葉金 |
| | | (14) 19 | (23) 55 | (37) 102 | (21) 91 | (3) 5 | × | 集花詞 |
| | (75) 298 | (12) 157 | (31) 193 | (40) 120 | (13) 66 | (1) 2 | × | 集載千 |
| (113) 322 | (75) 678 | (14) 108 | (32) 95 | (68) 202 | (41) 237 | (25) 75 | (26) 164 | 集今古新 |

と詞花集とが、入集人数に於いて何れも最少である。この数字上の相類似する現象が、単に新古今集内の関係であるか、それとも又それぞれこの二つのグループの原歌集間の関係とも一致するかを吟味するに、千載作者七五名の作は千載集では二九八首なるも新古今集で六七八首となり、著しい増加を示して居る上に、新古今初見の作者一三三三二二首に対し人数で少きも歌数に於いてはかへつて凌駕する。即ち一人当り平均の歌数は千載作者の方にはるかに大となるのである。一方拾遺作者四一名の中後拾遺集にも入集したのは二九名であるから、これについて比べると、二九名の歌数は拾遺集で二〇六首なるも後拾遺集では三五九首となり、同じく著しい増加を示す上に、後拾遺初見の作者六八名三二六首に比し、やはり人数に於いて少なるも歌数に於いては大であつて、一人当り平均の歌数は、やはり拾遺作者の方にはるかに大となる。即ち千載初見の作者は新古今集に於いて、新古今初見の作者より遙か重き地位を占め、拾遺初見の作者は後拾遺集に於いて、後拾遺初見の作者より遙か重き地位にある。この二つのまことに相類する関係は、新古今集内部に於ける関係とも一致して居る事が分るであらう。即ち新古今集内に於ける拾遺・後拾遺のグループと千載・新古今のグループとの類似は、これ等二つのグループ自身の類似がそのまま新古今集内にまで反映した結果に外ならないのである。

次に又千載集までは金葉・詞花から取る事多く、拾遺集までは古今・後撰から取る事が多い。この関係も相似して居るのであつて、両グループの四歌集の作者関係は、それぞれ千載集と拾遺集とに重心を存して、こゝから放射線的排列を為してゐる形が略々明らかとなるであらう。今これ等の二つのグループを仮りにそれぞれ千載群と拾遺群と名附けるであらう。しかる時、拾遺群の歌人とその